

ジェントルマン文化と近代

—— イギリス近代競馬の成立 ——

山 本 雅 男

はじめに

- 1 ジョッキー・クラブ —レーシング・カレンダー (以上本号)
- 2 クラシック・レース —スティーブルチェイス
- 3 サラブレット —ゼネラル・スタッド・ブック
- 4 文化としてのイギリス競馬

はじめに

18世紀のイギリスは、産業革命・工業化をその代表例に、農業革命や流通革命などさまざまな劇的変化が社会の隅々で進行した時代であった。これを、ふつうは近代化の時代と表現するわけだが、近代化が、しかし、自由化や平等化、さらには前時代的な特権の排除とそれによる大衆化を直截に意味するのなら、この時代にこの国に生起した事共の悉くについて、近代化の名辞を証示する事例だとは言い難い。とはいえ、近代化の内包に別の多様な要素のあることは言うまでもない。たとえば、機能的組織の中央集権化や国民国家単位による統一規格の平準化、均質化、また合理的法則に基づく問題処理の迅速化や簡略化等々は、いわゆる近代化概念の範型として、イギリスが他地域に方向性や指針を永く示してきたところでもある。だが、そうした領導的指示は、少なくとも近代化といわれる初期においては（いや、その後も一貫して）、自覚的になされたものではなかったと言いうる。つまり、この国が遺した事蹟のほとんどは、一見すると、近代化という普遍性の衣裳を被っているように見えながら、それは、範型として理念化された瞬間に纏わされる対他的な容姿であって、即自的には、たかだか自分達だけのために為したにすぎない、きわめて局地的で特殊な事共であることが少なくない、ということなのである。近代化という名辞には、そうした両義的な意味合いが含まれていることに、改めて注意を払っておきたい。

この小論で紹介しようとしているイギリス競馬の、就中、18世紀における変化の過程は、まさにそうした例の典型である。今日、世界のさまざまな地域で

大衆娯楽の華として隆盛を誇っている競馬の先駆的な手本に、イギリス競馬を挙げることは誰も否定しないだろう。大方が「イギリスは近代競馬の発祥地」と公言して憚らない。そして、18世紀のイギリス競馬界に起こった事蹟をして、競馬の近代化だと挙げて認定するのである。だが、近代イギリス競馬の成立と言われているものが、はたして、字義通りの、一義的な近代化を意味しているものなのかどうか、その解答を探るのが本論の意図するところでもある。

1 ジョッキー・クラブ —レーシング・カレンダー

イギリスにおける競馬事業の全国的な統轄組織は「ジョッキー・クラブ Jockey Club」である⁽¹⁾。

どのようなスポーツにおいても、その歴史的過程のある時期に、運営団体の組織的一元化と制度整備が行われる。国内の各地域で多様に実施されていた(実態は、簡単な約束事で楽しまれていた)当該スポーツのルールや施行規則を全国規模で統一し、一元的な基準で均一化するわけである。それは、交通・運輸の手段が整備され人や物の移動が簡便になれば、また情報伝達の技術が充実し知識の広範な共有度が増せば、当然のことに、促進されるところである。ジョッキー・クラブの成立も、そうした社会的背景の変化と無縁には考えられない。

18世紀の初頭には、イングランドに112ヶ所、ウェールズに5ヶ所の競馬場があつて⁽²⁾、この数はさらに増加傾向にあつた(因みに、現在は北アイルランド地域の2ヶ所を含め、全国に61ヶ所のコースがある)。このことは、たんにレース・コースがその数だけ存在したということを表わしているだけでなく、その数とほぼ見合う数の運営組織が、全国各地に、それぞれ別個に散在したことを示している。つまり、土地の貴顕人士が集り、それぞれ思い思いの取決め、規則(local rule)で競馬を行っていたのである。このようなわけであるから、この時代の多くのスポーツと同じように、競馬が賭博の対象として金銭の絡むスポーツであればなおのこと、規則の一元化と同時に、その適切かつ厳正な運用がより鮮明に求められることになった。

ジョッキー・クラブが結成された詳細については、明らかになっていないところが多い。一般には、1752年、ニューマーケットで組織されたことになっているが⁽³⁾、その根拠になっている次の一文に、ジョッキー・クラブの名称が見えるからである。

... A Contribution Free Plate, by Horses the Property of the Noblemen and Gentlemen belonging to the Jockey Club at the Star and Garter in Pall Mall, one heat on the Round Course, weight eight Stone, seven Pound.⁽⁴⁾

この一文は、馬の競売業者で成績記録者でもあった John Pond の *Racing Kalendar* に出てくるもので、そのなかに、1752 年 4 月 1 日ニューマーケットで、件のプレート・レースが開催されると告知されているのである。

たしかに、公的文書にクラブの名が現れたのはこれが初めてなのだから、その事実は尊重されるべきなのではあるが、だが、この記録書の出版が 1751 年であることを考えると、クラブの結成がそれ以前であることは間違いのないところだろう⁽⁵⁾。加えて、ここに見える「スター・アンド・ガーター」は、ロンドンの高級地パル・マル街に当時あったタヴァンの店名で、そのことから、ニューマーケットを発祥地とするには無理があろう。もっとも、1752 年になって、クラブがニューマーケットに一定の会合場所を確保したことは事実である。それまで、街中の Red Lion Inn を集会場に使っていたのが、この年にコーヒー・ルームを 50 年賃貸で手に入れているのである⁽⁶⁾。

ところで、ポンドの一文からは、当時の様子を窺わせるいくつかの興味深いことが読み取れる。

まず、'Plate' だが、これはレースの優勝賞品であるとともにレースの懸賞形式をも指している。「プレート競走」では、従来、楯が優勝者に供されていたが、この時代になると銀のカップが使われることが多くなっていた⁽⁷⁾。'King's Plate' など、王侯がこれを下賜する場合も少なくなかった。優勝杯を争う、こうした「プレート競走」のほかに、'match race' や 'sweepstakes' などの懸賞形態があった。前者は 2 頭による 1 対 1 の競走で、おそらく、歴史上、競馬の発生以来続いていた、もっとも原型的な競走形式である。後者は各馬主の出走登録料を賞金総額とし、勝者がそれを総取り (sweep) する形式である。現在、世界で一般的になっている「ステークス競走」は、'sweepstakes' から 'sweep' を取って、着順に応じた賞金額配分にしたものである。

告知文の後の方にある 'heat' についても若干触れておこう。17 世紀から 18 世紀にかけて盛んに行われたレースの形式が「ヒート」であった。すなわち、ひとつのレースは 3 ないし 4 のヒートで構成されており、そこで多くのヒートに

勝った馬が、そのレースの勝馬とされるルールであった（もちろん、各地域独自の取決めで多様な変則があった）。ただし、その1ヒートが4～6mileという、現在では信じがたい長距離であり、しかも、30分ほどの間隔をおいてヒートを繰り返す、きわめて苛酷なものであった⁽⁸⁾。当然のことながら、こうした熾烈なレースに耐えられるのは、高年齢の馬に限られるわけだし、また、レースの勝者が決定するまで相当な時間と手間を要するなど、いかにも悠然とした往時を偲ばせる、古の時代の産物であったことが分かる。それとともに、そうした過分な非労働生活時間を享受できる社会階層がどのようなものであるのかも、如実に物語ってまいよう。

この一文のなかでも、ジョッキー・クラブのメンバーが貴族やジェントルマンであることをはっきり示している。イギリスが、前世紀の二度におよぶ「近代市民革命」で、中産階級を中心とした平等な社会を実現したという見方があるとすれば、それは、とんでもない誤解である。大土地所有を基盤とする、この国の支配階級は、18世紀全体を通して少しも動揺することなく、中央においても、また、それぞれの地盤である地方においても、却って強堅な支配を固めることになるのである⁽⁹⁾。この世紀に勃興してくる、工業化に向けた資本主義を「ジェントルマン資本主義 gentlemanly capitalism」と表現することも、今ではけっして珍しくなくなっている⁽¹⁰⁾。彼ら貴族・ジェントルマン層の人びとは、政治や経済に支配的影響力を振るうとともに、その私的生活において享樂的、衛示的、奢侈的な生活を送る人びとであった。そうした生活時間の、格好な充当材料となったのが競馬であった。それは、彼らの生活が、公私いずれの面においても、根拠地である田園と断絶することなく持続し、そのため、交通手段としても、狩猟など遊興手段としても、馬との接触がきわめて濃密であったからでもある。イギリスで、「競馬は王侯貴顕のスポーツ」と言われてきた所以がここにある。

彼らにとっての競馬とは、馬を所有し競走に出走させることだけではない。賭博はもちろんのことだが、馬を生産——いうまでもなく、馬種の人工的改良によって「サラブレッド」が誕生した——し、売買する事業も彼らの主たる関心のひとつであった。Tattersalls という競走馬の売買を専門とする企業がこの時期（1766年）に創業しているのも、奇しき符節である。そして、何よりも、競馬を介しての社交がその中心にあった。社交による人脈形成と情報交換によって、イギリスにおける支配階級の堅固さは彌増したのである。彼らにとっての

社交生活は、余暇の暇潰しではなく、それ自体が生産性をもった労働時間であったと考えるべきだろう。

首都ロンドンにおける社交の場としてのタヴァンやイン、コーヒー・ハウスなどの存在は、18世紀の半ば頃までのあいだ、ある意味で、イギリスの政治、経済、科学、文化の先端部分を動かしていたとさえ言われる。そうしたなかで、「スター・アンド・ガーター」は馬好きの貴顕人士が好んで集る店として、その名が知られていた⁽¹¹⁾。彼らは、宮廷に出入りする上位貴族であったり、また、庶民院議員として議会に議席をもつジェントルマンであったりするわけで、そうした人びとが首都に上京したさい、馬を共通の関心事に寄り集う場所が、このタヴァンであった。ここだけではなく、各所のコーヒー・ハウスやタヴァンには、それぞれの関心をもった人びとが集り、深更まで談論風発に花を咲かせ、ときには鬪鶏などの賭博に現を抜かすのであった。

しかし、隆盛を極めたこの種の店も、18世紀半ば近くなると急速にその勢いを衰えさせる。ようするに、それらの店に集っていた同好の士連中が、独自に固有な一定の場所を求めるようになったのである。そうした意志が、単に場所だけのことではなく、組織をも作ることに向けられたのも自然な成り行きであろう。そこで、この時代に、次々と「クラブ」が生まれることになったわけである。ジョッキークラブがそうして生まれたクラブの一つであることは言うまでもない。

ジョッキークラブの成立年が不鮮明であることは既述のとおりだが、結成メンバーが誰であったのかについても、実は分かっていないのである。そうした事情は、イギリスのスポーツ界でもとりわけ長い歴史を誇るクリケットのクラブ(MCC)が1787年に創設された経緯についても言える⁽¹²⁾。序でながら、クリケットの全国的な統一ルールの整備が行なわれたのは、1744年のことだった。それはともかく、どちらの組織も、貴族・ジェントルマン層が中心になって構成されていたことは言うまでもない。むしろ、だからこそ、結成前後の事次第について確りとした記録を残さなかったのだ、と考えられるのである。

組織や制度の仕組、沿革を明確にする必要があるのは、それが不特定多数者の只中に置かれ、周囲の不特定者に公平な参入権が保障され、かつ公開されることで、逆にその権威を高めようと意図される場合である。近代社会のあらゆる組織や制度は、基本的にこの原理の上に成り立っている。然るに、ジョッキークラブなどイギリスのクラブが、そうした近代の組織観とは全く別の準拠枠に

依っているかに見えるのは、公平や公開の必要がほとんど存在しないからにすぎない。メンバー各自が、互いの生まれ育ち、氏素性を係累の末端まで知り抜き、しかも何代にも遡って知悉し合っている者同士のあいだで、たとえ組織を作るにせよ、それを記録し残す必要などなかったからである。ただ、各地の交流が盛んになり、また、一般大衆が（専ら賭博に限定されているが）競馬を楽しむようになってきて、さらに、不揃いのルールが各地で各個独自に通用しているなか、何らかの統一基準、規則を求める声が仲間内のあいだからも起こるようになって、そこで生まれたのが、中央組織としてのジョッキークラブであったのだ、と考えられる。

こうして成ったジョッキークラブが最初に発した指示は、1758年3月24日の、検量に関する規定であった。すなわち「ニューマーケットで行なわれるすべてのレースにおいて、騎手は必ず後検量を受け、その許容範囲は2ポンドを上限とする。この規則に従わない騎手は、クラブより罰則を適用され、以後ニューマーケットでの騎乗を禁止される」⁽¹³⁾。これを裏返せば、レースにおける騎手等の検量が正確に行なわれていなかったという状況が、当時はよく見られ、それゆえの不正も罷り通っていたものと思われる。また、ジョッキークラブの威光が、本拠地ニューマーケット以外には依然及んでいないことも窺わせる。

次の‘second order’と呼ばれる指示が1762年に出される。これには、「レース中の出走馬を識別するため、また、騎手の服色が判別できないことから生起する不正を防止するため、クラブに所属する貴顕諸公は、配下の騎手が騎乗時常に着用する服色を登録すること」とある⁽¹⁴⁾。この指示によって、服色（勝負服の色・模様）が登録されることになったクラブ・メンバーは19人。これが公的文書に載った最初のメンバー数である。とはいえ、この人びとも、全国に数多い馬好きの貴族・ジェントルマンのなかから、特に選ばれた人びとというわけではなく、ニューマーケットの「コーヒー・ルーム」に足繁く顔を出し、会合を重ねていた面々であった。クラブは、この段階でもなお、緩やかな組織形態であったものと思われる。ジョッキークラブが、イギリス競馬界のなかで中心的な存在として権威ある統轄機関になっていくのは、19世紀も半ば近くになってからなのである。こうした事情は、後で触れる「サラブレットの三大始祖」の成立ともひじょうによく相通している。

ところで、設立当初はともかく、しだいに固まっていった（そして、現在もなお続く）ジョッキークラブの管掌事項について触れておこう。クラブの主

管する業務としては、次のような事項が挙げられる。すなわち、競馬施行上のさまざまな規則の制定および改廃、調教師・騎手および競走執行員（発馬、距離計測、監視、着順判定等）の免許交付ないし廃停止、馬と馬主に関する諸登録・管理、上訴の審理等である。これを見ると分かるように、ジョッキー・クラブの所掌範囲は、基本的に、競馬というスポーツの形式・枠組の管理、運営に限られているのである。つまり、競馬のもつもうひとつの側面である賭博については、少なくとも組織的には一切関わりをもたないということである。これが、イギリス競馬の、きわめて顕著な特徴のひとつである。たとえば、日本の競馬が、中央においては日本中央競馬会が、地方においては各地方自治体関与の主催組織が、それぞれ開催と賭博——勝馬投票券（馬券）の発売および払い戻し——の一切を、総合的かつ独占的に掌握しているのとは好対照をなしているのである。

このことから、興味ある事実が二点引き出せる。第一に、イギリスにおいては、競馬を筆頭する賭博事業が、一定の法的管理の下にあるものの、基本的に民営事業としてなされているという事実である。‘bookmaker’という賭博を専門とする企業の営業活動は、多くの賭博愛好者がこれを利用するというイギリス人気質ともども、その実態、存在そのものが、イギリスの社会と文化の特性を示すものといっても過言ではあるまい。

もうひとつの事実は、ジョッキー・クラブが、その発端から現在にいたるまで、一貫して民間の団体であり続けたという事実である。イギリスに続いて競馬事業を始めた各国でも、同様の統轄団体が組織された（組織名にジョッキー・クラブの名を冠するところが多い）が、それらのほとんどが、賭博を巡る事業ということで、国家や公的機関と密接な関係をもたざるをえなかったなかで、この国のジョッキー・クラブがその独特な位置を保ち続けてきたのは瞠目すべきことと言えよう。なぜかなれば、ジョッキー・クラブが営利のみを目的とする組織ではなかったからだと考えられる。もちろんメンバーのなかには、個人として、競馬事業から莫大な利益を得ているものも数多くいるだろう。だが、組織として利潤追求に奔走することはなかった。また、クラブ組織そのものも、既述のごとくきわめて閉鎖的、特権的で、公平性や公開性を原理とする近代的組織観とは、まさに対極にあるものとなっている。ところが、そうした特権性や排他性こそが、貴族・ジェントルマン層の、実は存在理由になっているのである。つまり、彼らの行動に見られる特権的かつ衛示的対他性が、彼らの地位証

明と存在根拠を示す象徴となっているということである。イギリス競馬が、競馬発祥の原点といわれながら、世界のなかでも特異な存在になりつつあるのは、その核心に、そうしたジェントルマン気質濃厚な中枢部分を有しているからだと考えられる⁽¹⁵⁾。

さて、ジョッキー・クラブ創設を巡って、詳らかなことがきわめて少ない点については再三述べてきた通りだが、これは、ようするに過去の競走成績を含め事実関係を書き記す記録というものに、彼らがほとんど関心を示さなかったということをも物語っている⁽¹⁶⁾。彼らジェントルマン層の粗笨な性格がよく出ている。だが、スポーツであり賭博である競馬にとって記録が欠くことのできない資料であることは、周知の通りである。戦績や順位等の成績や計時、距離、獲得賞金そして血統等々、競馬に関する記録類は溢れるばかりである。ジョッキー・クラブの専管業務のひとつに、こうした記録を集積した '*The Racing Calendar*' (『競馬公報』ないし『競馬成績書』と訳される) の発行があるのだが、クラブ設立当時の、クラブと記録集との関係についても注意したいところがある。

全国各地で行なわれている競走の成績を集め、書き留めるという困難な仕事に初めて手を出したのは、ウェスト・サセックス州アランドル出身の John Cheny なる人物であった。彼は、1727 年、"*A Historical list of all Horse-Matches Run, And of all Plates and Prizes Run for in England and Wales (of the value of Ten Pounds or Upwards) in 1727*" という書名の本を出し、ここに初めてイギリス全土の統一的な記録文書が歴史に遺ることになった⁽¹⁷⁾。チェニーの意図は、純粹に記録だけを纏めるという、いわば無垢な感情に発するものではなく、年々進む高齢馬の落ち込みと若駒の抬頭を記録の上から示し、読者である貴顕諸公に賭博のさいの目安にして貰おうという、なかなかに实际的、商魂逞しいものだった（因みに、闘鶏についての資料も併載されていた⁽¹⁸⁾）。

1750 年に彼が亡くなると、先にも出たジョン・ポンドが "*Racing Kalendar*" の書名でこの仕事を引き継ぎ、1757 年まで続ける。さらに、Reginald Heber が綴りを正しく改め直し、1769 年まで毎年出し続ける。彼の後、Walker なる人物が2年間だけ、この仕事を続けるが、すぐに、ニューマーケットの記録書担当者 Tuting とジョッキー・クラブの職員であった Thomas Fawconer という二人の共同編集による仕事に打ち負かされることになる。おそらく、この頃から、ジョッキー・クラブが記録書の出版に主体的関わりを持ち始めたということである。つまり、それまでは、ジェントルマン層ではない一介の人物たち、

それも記録好きの好事家とも呼べる人びとが、こつこつと記録を集めては出し続けるという地味な仕事に打ち込んでいたのだろう。

そして、1773 年になり、漸くと言うべきか、ジョッキークラブが正式に指名した人物によって成績書が編纂されることになる⁽¹⁹⁾。この当時、ニューカースルの弁護士であった James Weatherby がこの役を負うたのであった。

‘Weatherbys’ といえば、19 世紀を通じて（そして、いまなお）ジョッキークラブが所掌するほとんどすべての実務管理を請け負う事務会社である。クラブは、ウェザビーズの業務貢献があつてはじめて、その権威や存在そのものが現実化するのである。クラブとウェザビーズとの、そうした類稀な関係ができあがる第一歩となったのが、ジェイムズによる記録書の引き受けだった（1791 年には、サラブレットの種の確定に大きな役割を担う “General Stud Book” の編纂も手掛けることとなる）。ところで、この指名のさいに Charles Bunbury 卿の強い後押しのあつたことが指摘されているのだ⁽²⁰⁾。これは、その後のウェザビーズとクラブとの関係、ひいては競馬界全体のことを考えるうえで、留目したい経緯である。というのも、ウェザビー一族の存在がもつ意味は、制度上の関係を越えていると言えるからである。

『レーシング・カレンダー』は、先のポンド編集の場合がそうであったように、成績などを記録するだけではなく、クラブが発する指示や規則をも伝達する重要な媒体としての役割を果たしていくようになる。それは、いうなれば、イギリス近代競馬の体裁が整っていくことを意味する。規則の制定と全国への浸透こそが近代たる所以であるからだ。その過程の中心近くがウェザビー一族によって独占的に握られているとすれば、その意味は尋常ではあるまい（まったく同様のことが『血統書』についても当てはまる）。また、ジョッキークラブがイギリス競馬界の中心として信任を集め、権威化していく歷程と、バンベリー卿が斯界に現れ、クラブ内で発言力を強め権勢化し、さらには 1821 年の死まで「終身会長」として神格的存在になっていく過程とが、みごとに重なっているのである。彼とジェイムズとの結びつきとその後の成り行きは、これは近代スポーツ全体についても言えることだが、制度や組織、ルール、諸規定を制するものこそが、その主導者となり、権威化していくことを示している。

*

*

イギリス競馬の、就中 18 世紀における変遷は、たとえば規則の全国的な整備や競走形態の簡素化など、近代化の名に相応しい側面をもっていた。だが、その一方で、勃興する上位中産層を横目に見ながら、自らを囲い込み、排他的に自己完結化する貴族・ジェントルマン層によるクラブの成立など、近代化とは裏腹の事態も現出した。迎える 19 世紀に、頂点に向けさらに上り坂を昇ることにはなっても、大衆という不特定多数者の跋扈する 20 世紀になってなお旧態をほとんど変えなかったイギリス競馬は、急速にその古風さを特色としていくのである。近代の嫡子である大衆の存在に、彼らは眼を瞑り続けたのである。だが、その萌芽は、この成立期にすでに胚胎していたと言えそうである。

註

1. この名前の由来を 'jockey' (騎手) として、騎手の団体とする解釈があるが、それは誤りである。この時代、'jockey' は馬主 (horse - owner) を指す言葉であった (G.Hammond, *A Book of Words: Horse Racing*, (Carcanet, 1992), p.119) し、馬主が自ら騎乗し騎手になることはあっても、専門職としての騎手はあくまでも馬主に雇用される存在であることを考えれば、そもそも騎手がそうした上部組織を作ることなどありえないことである。
2. Derek Birley, *Sport and the Making of Britain*, (Manchester, 1993), p.110.
3. Roy Porter, *English Society in the Eighteenth Century*, (Penguin, 1990), p.237. G.Hammond, *op.cit.*, p.119.
4. Roger Longrigg, *The History of Horse Racing*, (Macmillan, 1972), p.89.
5. これを踏まえて、結成年をあえて 1750 年ないし 1750 年頃と明記するものもある。Earl of Suffolk, *Racing*, (Longman, 1893), p.53. Dennis Craig, *Horse Racing*, (J.A. Allen, 1963), p.166. Norman Barrett (ed.), *The Daily Telegraph Chronicle of Horse Racing*, (Guinness, 1995), p.8.
6. Frank Siltzer, *Newmarket: Its Sport and Personalities*, (Cassell, 1923), p.140.
7. G.Hammond, *op.cit.*, p.157.
8. R.Longrigg, *op.cit.*, p.69.
9. R.Porter, *op.cit.*, p.340.
10. M.Daunton, 'Gentlemanly Capitalism and British Industry', *Past and Present*, 122, (1989). A.Porter, "'Gentlemanly Capitalism" and the Empire', *Journal of Imperial and Commonwealth History*, VIII, (1990).
11. この店は、Swift も会員の一人であった Brother's Club がパトロンであったことでも有名。この他にも、画家の Reynolds が会員であった George Selwyn's Thursday Club や

Dilettanti Society もここで会合を開いた。また、M C C (Marylebone Cricket Club) の祖型である White Conduit Club は、この店に来るクリケット好きの常連が結成したクラブであった。さらに、Nottinghamshire Club の会員であった Byron が従兄弟の Chaworth と喧嘩し、瀕死の重傷を負わせたのもこの店内であった。Ben Weinreb and Christopher Hibbert(ed.), *The London Encyclopedia*, (Macmillan, 1983), pp.834ff.

12. D.Birley, *op.cit.*, p.123.
13. C.M.Prior, *The History of Racing Calendar and Stud Book*, (The Sporting Life, 1926), p.141.
14. *Ibid.*, p.143.
15. ここでいう特異性とは、他国の状況と比較して、という意味である。つまり、娯楽の大衆化という時代趨勢のなかで、構造的に閉塞状態に陥っているということで、それは、競馬事業の盛衰を示すほとんどすべての指標（投資額、収益額、愛好者人口、馬種生産および取引数等）において、アメリカやフランス、日本にその地位を奪われているところに端的に現れている。
16. Earl of Suffolk, *op.cit.*, p.55.
17. *Ibid.*, p.23. 記録集の起源は 1670 年に John Nelson が纏めた *Calendar of Horse-racing* に遡るのだが、これはニューマーケットでのレースに限られたものであった。F.Siltzer, *op.cit.*, p.143.
18. G.Hammond, *op.cit.*, p.39.
19. R.Longrigg, *op.cit.*, p.91.
20. D.Birley, *op.cit.*, p.136.